
Invitation

につくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Invitation

【Nコード】

N5520C

【作者名】

につくん

【あらすじ】

私たちは恋をする。惑わし合い、誘い合い、時に裏切り。それでも私たちは、恋をする。そんな恋を経験した、5人の男女の物語。

00・Introduction

Invitation(名詞)

- ・招待
- ・誘惑

私たちは、恋をする。

私たちは、人を愛する。

互いに惑わし合い、誘い合い、時に裏切り。

それでも私たちは、恋をする。

01・Rain days(前)

「チヒロちゃん！ 今日、俺ん家遊びに来ない？」

「えっ……？」

はかまた 袴田 ちひろ 千尋は名前を呼ばれた方向を振り向いた。その方向では、幼稚園くらいの男の子とチヒロという自分と同じ名前の女の子が手をつないでいた。

「なんだ……私じゃなかったか」

千尋はフウツとため息をついて、自分の情けなさに心が痛んだ。

千尋は愛知 めいじょう 名城女子大学に通う3年生。文学部日本文学科に所属している。

今日は8月1日。昨日まで半月近く続いた前期テストも無事終わり、今日から長い長い夏休みだ。テストの出来もなかなかよかった感触がしたから気持ちよく夏休みを迎えられるのが普通だが、千尋はこの夏休みや春休みというような長期休暇が苦痛で仕方がなかった。

休みが近づいてくると、いつも同級生は同じ話題で盛り上がる。

「ねえ、アユミは今年は彼氏と旅行に行くの？」

「当たり前じゃない！ だって夏休みだもん」

「私はこないだフラれたから、新しい彼氏作んなきゃ！」

そんな話を友達はいつもしている。もう3年目だから、その時期が来るのはわかっていたがやはり会話に入りづらい。そして、いつも話を振ってくる友達がいて、こつ聞かれる。

「千尋はどうすんの？」

「この場合の「どうすんの？」は「夏休みはどう過ごすの？」の意味ではないだろう。ちよつとひねくれた考え方もしれないが「彼氏は作るの？ どうすんの？」というように聞かれているようにしか千尋には思えない。

そして、いつもこう返す。

「私は別にないよ……」

あえて夏休みとか、ハッキリと何がないのかをは口にしない。そうすることでいつも交わしてきたが、今年はそうはいかなかった。

「千尋つてさあ、けっこうカワイイんだから彼氏作らないなんて不自然だよ？」

不自然も何も、できないものはできないのだから仕方がない。

中学時代も高校時代もそれなりに好きな人はできた。でも、それはみんなに人気があるスポーツが得意な男子だったり、学内外でも彼女がいたりする人たちばかりだった。だから目立たない千尋はその恋心もひっそりとしまい込み、友達にも家族にも相談の一言もすることなく過ごしてきた。

目立たないのだから、千尋に告白するような男子もいなかった。

千尋がよくしたことといえば、友達の恋愛相談に乗ることくらい。それが意外と千尋のアドバイスでケンカしていたカップルが復活したり、告白がうまくいったりということがなぜか多かった。だから相談を持ちかけられることも多かったのだろう。

大学に入ってからもうそういう状態がずっと続いている。女子ばかりだからかもしれないが、1ヶ月に2人程度はいつも相談に乗っている。不思議なことに、毎回違う子ばかりだ。つまり、千尋に相談して受けたアドバイスどおりに動いた子たちはみんなうまくいっているのだ。だから二度と相談に来ることもない。

相談に来た子にいつも「メルアド教えて！」と言われるので教えて、相談が来たりしたら真面目に答えている。そうしてイザコザだったり些細なトラブルが解決した後にふと気になって「最近どうしてる？」というメールを送ると『この宛先はすでに存在しないか、誤っています』というメールが返ってくることが多い。

その場だけの友達関係。

別に千尋自身はそれを苦痛とは思っていなかった。そういう程度の関係だった。そう割り切るのだ。

ついこのあいだもそういうメールが返ってきた。すぐにアドレス帳から削除した。

「単に利用されてるだけかもね……」

自嘲気味に千尋はクスツと笑った。

「そうか……そろそろ就活の準備でもしようかな」

もう3年生。秋からは就職活動が始まる。そろそろ就職試験用の問題などの練習をするのもいいだろう。ちょうどいいことに、夏休みは予定が何もなし。

「じゃあ今日は本屋に寄って帰るか」

携帯電話を取り出した。今日はゼミの用事で学校へ出ていたので帰りに寄り道するにはちょうどいい。

大学から歩いて10分のところに電車の駅がある。けっこう便利な大学だ。

定期券を取り出して改札をくぐる。ホームに立ってしばらくすると各駅電車が滑り込んできた。

『ご乗車ありがとうございます。この電車は、各駅停車・尾張瀬戸行きです。尾張瀬戸までの各駅に停車します。次は清水、清水です』

千尋の降りる駅は終点のひとつ前、瀬戸市役所前駅だ。けっこう時間がかかる。朝も早かったし、少しだけ眠ろうと思いき千尋は目を閉じた。

『次は、水野、水野です』

車内放送に千尋が気づいて目を開けると、降りる駅の2つ手前の駅に向かうところだった。ところがそれ以上に驚いたことがあった。ものすごい夕立。

すごい色をした雲がいつのまにか空に立ち込め、バケツをひっくり返したような大雨が降って窓に打ち付けている。

「うそ……傘持ってきてないのに」

今日はなんてついていないのだろう。千尋はまたため息を漏らした。

『瀬戸市役所前、瀬戸市役所前』

降りなければならぬ駅に着いたので下車すると、さっきより雨脚が強まっている。こんな天気だからだろうか、駅前にも人影はあまり見当たらない。

「仕方ないなあ……雨が収まるまで待とう」

千尋は階段に腰掛けて、雨が収まるのを待つことにした。

10分くらい経って、ようやく雨脚は弱まってきた。霧雨のような状態にはなっているが、なかなか止む気配はない。

濡れたままで本屋さんに入るなど迷惑極まりないので、このまま家に帰るほうがいいだろうと思い、千尋がようやく重い腰を上げたとき、後ろから声をかけられた。

「よろしければ、入っていきませんか？」

千尋が後ろを振り向くと、背の高い男性が傘を片手に千尋の顔を見ている。

「え……私ですか？」

男性はにっこり微笑んで「ええ。傘、お持ちじゃないんでしょう？」と聞いてきた。

「あ、はい……でも……」

「ああ、変に気を遣わないでくださいね。俺の傘、けっこう大きいからあなたくらい小柄な女性でしたら余裕で入りますから」

久しぶりに自分の容姿を褒められた気がして、千尋は少し恥ずかしくなった。

男性は傘を開き「行きましょう」と千尋の手を引いた。

霧雨になっているので、足元が濡れるような心配をすることはなかったし、まして傘が小さくて濡れることなどなかった。

傘に入れてもらっているのだから、途中で寄り道なんてできない。このまますぐ家に送ってもらったほうが言いには違いないと思い、家の方向を聞かれるのを千尋は待っていた。

「あの、お名前は？」

男性が急に名前を聞いてきたので千尋は「えっ。あ、えっと……」と少しためらってしまった。

「ああ、そうか。俺から名乗るべきですよ」

「コホン、と軽く咳払いをして男性はしっかりと千尋の目を見つめて言った。

「名古屋歯科大学3年の、沖見 亮平おき しょうへいと申します。今年で21です……ってああ、年齢は必要ないですね」

亮平が苦笑いするので千尋もクスツと笑ってしまった。

「あ、私は愛知名城大学の袴田 千尋と申します。同い年です」

「え？ 21歳なんだ」

亮平は少しうれしそうに声を上げた。

「それじゃあタメですね！ そっか、じゃあ敬語なんて堅苦しいから、タメで喋りましょうよ」

「えっ……でも初対面なのに」

「もうこれだけ喋って相合傘までしておいて、初対面だから敬語なんてのも変でしょ？」

そう言われればそうだ。相合傘も流れに乗ってとはいえしてしま

っている。ふつうはそうそうしないことだ。まして名前を知らなかった相手と。

「そう……ね。じゃあ、そうしょっか」

千尋が小さくうなずくと亮平はうれしそうに「やった!」と喜んでいた。

「それとき、袴田さん」

亮平が左斜め前の方向、本屋さんを指差した。

「もうすぐ就活だけど、なんか問題集とか買った?」

「いえ……まだ」

「そしたら、俺、今日ちよつとSPIの問題集買って帰りたいから本屋さん寄ってもらってもいい?」

なんとという偶然だろうか。千尋は内心驚いていたが、偶然は偶然だろう。

「私も今日、雨が降らなかつたら買って帰ろうと思ってたから……行こっか」

「よし! じゃあ雨宿りついでに問題集買いにゴー!」

亮平が走り出したので、千尋も慌てて後を追った。

01・Rain days(前)(後書き)

ひとりの女性から始まる連鎖的恋愛ストーリー「Invitation on」。以降、登場人物は変わっていきますが、それまでに登場した人物が必ずどこかに影響を与えています。そして、必ずどこかに次の物語に関わる人物がいます。それを探しながら読んでくださるともっとうれしいです

01・Rain days(中)

本屋に入ると、やはり雨のせいであまりお客さんはいなかった。あまり広くはない店内にいるのは店員らしき若い女性、近所の中学校の制服を着た男子、初老の紳士。そして亮平と千尋の5人だけだった。

「けっこう空いてるね」

千尋が小さい声で亮平に言う。

「空いているほうが落ち着いて探せていいよ」

「そうだね」

それからしばらく、二人は黙々とSPIの問題集に目を通した。どの問題集もよさそうに見えるが、自分に合ったものが一番だ。

20分近く経って、ようやく千尋は自分に合った問題集を手にすることができた。それから亮平の姿を探したが、周囲には見当たらない。

「あれ？ 沖見さん？」

辺りを見渡すが、やはり姿は見当たらない。しばらく店内を回ると、後ろからコーヒーのいい匂いが千尋の辺りを包んだ。

「あ、どうだった？ いい問題集、見つかった？」

小さなコーヒーカップを両手にした亮平が立っていた。

「うん。あとはレジをすればいいんだけど……どうしたの？ そのコーヒー」

「ああ、俺も今日知ったんだけど夏休み期間中に1500円以上の本を買った人はコーヒーやジュースのサービスがあるんだって」

千尋もこの本屋さんの近所住まいだが、そんなサービスをやっているとは知らなかった。

「テーブルが奥に5つほどあるらしいから、そこに座ってちょっと休憩しようよ」

「じゃあ私、その前にこれ買ってくるよ」

「わかった。俺、先に座ってるから」

亮平はそういい残り、先に奥のテーブルへと向かっていった。

さつきからお客さんは変わっていない。店員さんを除くと、中学生とおじさんだけ。おじさんのそばを通ると『老後の生け花』という本を読んでいる。白髪混じりの髪の毛ということは、もうすぐ定年退職でもなさるのだろうか。生け花を新しい趣味にするのかな。活花というと女性がすること、というイメージもあるが最近はどうでもないのだろうか。千尋は生け花のことはよく知らないので、あまりこうだ！というように断言はできない。

「1点のお買い上げで、1590円になります」

レジで精算を済ませる。女性はけっこう自分と年齢が近い。アルバイトだろうか。千尋はアルバイトを経験したことがないのでこういうことをしている人に感心する。

「ありがとうございます。今でしたら1500円以上お買い上げの方にはコーヒーかジュースのサービスをいたしておりますが、いかがでしょうか？」

「あ、さつきの男の人が私の分までなんか用意しちゃってたので…

…ありがとうございます」

「あ、お客様がお連れ様でしたか。かしこまりました、ありがとうございます。ございます。ごゆっくりどうぞ」

店員に軽く会釈をし、千尋は奥のテーブルへと向かった。今度は中学生の後ろを通った。よくよく見れば、男の子のいるコーナーは「少女マンガ」のコーナー。そういえば男の子にも人気のある少女マンガがあると聞いたこともあった。千尋の家にもけっこうな数の少女マンガがある。けれど、弟は1冊もそういう本を手にしたことはない。

まあ人の好みにケチをつけたりするなんてこともしないので後ろを素通りしたが、男の子はやはりどこか恥ずかしそうにしていた。

テーブルのある奥のスペースは意外ときれいな空間だった。シッ

くな照明が施されていて、雰囲気と同じ本屋さんとは思えない感じだ。

壁はなく、外が全部見えるようにガラスで仕切られている。外には鯉が泳ぐ小さな池がある。それを眺め、頼杖をつきながら亮平がコーヒーを口にしていた。何か重いことを考えているのだろうか、少し暗い雰囲気が出たのは気のせいだったのかもしれない。

「あ、買い終わった？」

亮平がすぐに気づいて千尋の分のコーヒーをテーブルに置いた。

「うん。私の分までコーヒー頼んでくれてたんだ」

「きつと1500円超えるからね、SPIとか買っと」

「読みが深いんだね」

「いや、そんな褒められることでもないよ」

亮平は少しはにかんだ様子で頬をかいた。

千尋も微笑みながら用意されたコーヒーの前の椅子を引き、腰掛けた。

「雨、止まないね」

千尋は外をボーッと眺めた。この店の庭がけっこうオシャレなデザインになっていることに今さらながら気づく。植木が丁寧にカットされており、その木々の葉の上を綺麗な雨粒が流れていく。

コーヒーを手にしようと向き直ると、亮平と目が合った。

「おいしいよ、コーヒー。飲みなよ」

一瞬、亮平も照れるような顔を見せたが、それは気のせいだったのだろうか。

千尋は気に留めず、コーヒーをすすった。しかし、やはり亮平の視線が千尋に注がれているように感じる。

変にドキドキしてくる。

今までにない経験だ。男性と二人きりでコーヒーを飲んだり、買い物したり。まして二人きりで話したりすることなんて最近では皆無に等しいことだった。

「あのさ、袴田さん」

「はっ、はい!？」

改めて名前を呼ばれるとドキッとしてしまう。

「めっ、めっ、めっ……」

「め?」

「メールアドレスとか、交換してもらっていい!？」

「えっ……」

「ダ、ダメ……かな?」

フルフル、と首を横に振った。

「えっ!？ じゃあ……」

「……お願いします」

千尋は小さく返事した。

「じゃあ、赤外線で送るね」

「はい」

亮平と千尋の携帯電話がカチツと音を立てて触れ合う。別に、こんなにくつつける必要なんてないのだが、なぜか自然とそうしてしまった。

「……ありがとう」

亮平はうつむいたまま、千尋に礼を言った。

「いえ……」

なんだか恥ずかしくていたたまれない。

届いた。

千尋は亮平のデータを開いた。

『氏名：沖見 亮平 電話番号：090-4653-5741
メールアドレス：i-love-you-chihiro@ezweb.ne.jp』

「えっ……!？」

千尋は驚いて顔を上げた。

「あの……このアドレス」

「好きです」

亮平の顔つきが急に真剣になった。

「……。」

千尋も思わず赤くなる。幸い、少女マンガのコーナーにいる少年には聞こえていないようだ。

「ずっと貴女のが好きでした」

「……でも、私……」

「付き合ってください」

いいのだろうか。自分のような人間と、彼みたいにとてもいい人が付き合うなんて。そもそも、自分は男性と仲良くすることすらなかったのに。急にそんなことを言われても、困ってしまう。

「ごめんなさい……。やっぱり私」

「そういうと思ったよ、君なら」

「えっ」

突然、亮平が立ち上がって荷物を片付け始めた。

「あ、あの」

千尋が戸惑っているうちに、亮平は全部荷物を片付けて席を立ち上がった。

「今日あったこと、全部忘れてください」

「で、でも」

「ホントにいいんです。じゃあ」

「あっ……沖見さん！」

亮平は傘も持たずに、店を飛び出して行ってしまった。

店内には、千尋と二つのコーヒーカーップ、そして亮平の傘だけが残されていた。

01・Rain days(中)(後書き)

突然の告白。千尋は戸惑いを隠せず思わず断ってしまふ。傘だけを
残して立ち去った亮平。二人はこれっきりなのでしょうか……？

01・Rain days(後)

あれから一週間がたった。

沖見 亮平はいつもの駅で呆然と空を眺めていた。

偶然だが、今日もあの日のように曇り空だ。ひよっとすると、もうすぐ夕立が降り始めるかもしれない。西のほうからゴロゴロと雷の音も聞こえてくる。

「参ったな……雨の日は嫌いになりそうだ」

自嘲気味に亮平は笑った。

駅の改札を出ると、生ぬるい風が頬をなでた。あの日もそんな風が吹いていた。駅前の横断歩道。不意に、一週間前に千尋と歩いている自分の姿が蘇ってきた。

「……。」

急に涙が出てきた。この一週間、自宅でどれだけ泣いたかわからない。なぜあんなことをしたのだろう。思いを伝えたいが故にあの日、コーヒーを千尋がもらいに行っている間にメールアドレスを変更した。よく考えたら、あんなのドン引きされるに決まっている。

おまけに、前のアドレスも二度と使えないようになっていたので友達に無意味に変更しました、のメールを送信しまくった。もちろん、あのアドレスでは送れないので変更しているが。

「なんで俺、あんなことしたんだろう……。」

亮平は今まで小学校から高校までずっと男子校に通っていた。女性と喋ったりするだけでドキドキして、今まで相手にもあまりされなかった。

千尋と出会ったのは、大学に入ってすぐだった。駅で、帰りの電車で、時々見かけた。そのたびに千尋のほうを見て、話しかけたいと思っていた。けれど、女性との会話に慣れない亮平にはかなりの度胸が必要だった。

そして、このあいだ。

偶然にも雨が降った。偶然にも千尋が駅にいた。偶然にも自分は傘を持っていた。様々な偶然が重なって、二人は出会った。

この機会を逃すと、自分は二度と恋愛ができないのではないかなんてそんなことを考えたのか、自分でもわからない。焦っていたのかもしれない。結局、焦りが招いたのは誤解、そして別離だった。といっても、自分からすべて蒔いた種。今更どうしようもない。「あきらめるしかないか……ないか」

涙で濡れていた頬に、別の液体が 雨がかかってきた。あつという間にその雨脚が強くなり、みるみるうちに亮平の服を濡らしていった。

「……？」

急に、亮平の周りだけ雨が止んだようになった。上を振り向くと、黒い大きな円形のものが眼に入る。

「よろしければ、入りませんか？」

千尋の優しい声。優しい目。

「千尋……さん」

「びしょ濡れだと、風邪ひきますよ？」

千尋が持っているのは、このあいだ亮平が放って行った傘だった。「……。」

亮平が涙目で千尋を見つめた。

「泣かないでくださいよ。私だって、泣いたんですよ」「えっ……？」

「実は、沖見さんのこと、ずっと好きだったんです。毎日、電車で見えてたんです。だから、駅で一週間前に声かけられたときはとても嬉しかったです。でも私、口下手で……考えさせてって言おうと思っただけど、ちよっと言い方がマズかったみたい」

千尋はペロツと舌を出して笑った。

「じゃあ……」

千尋はスツと傘を亮平に手渡した。

「受け取ってください」

千尋は差していた傘を折りたたみ、亮平の手にギュッと握らせた。

「これって……」

「鈍い人だね」

千尋はギュッと亮平の体を抱きしめた。

「私のそばに……ずっといてね。本屋さんにも、時々誘って。お茶、しようね」

「うん……もちろんだよ」

二人は雨の降る中、しばらく抱き合っていた。

01・Rain days(後)(後書き)

雨がキツカケで出会った二人。今度の連鎖的恋愛経験者はいつたい誰でしょうか？ 今後の展開にご注目ください

02・少年漫画 少女マンガ(前)

(さっきの男の人と女の人、大学生かな)

三嶋 巧はさっきまで店内にいた二人の男女のことを思い出していた。あの雰囲気からすると、友達以上恋人未満といった感じだった。男の人はついさっき顔を赤くしてそそくさと外へ出て行ってしまった。それからすぐに、女の人はずなだれた様子で傘と荷物を持ってゆつくりと店を後にした。

(マズいもの見たかな……)

巧は少し心が痛むような感じがした。ひよつとして案外、あの二人は付き合っていて別れ話をしたとか? でも店内に入ってきたときはとても仲が良さそうだった。10分や20分で突然愛想を付かせて別れるなんていうこともあり得ない。

巧はもう一度、店の外を覗こうと低い身長で背伸びをした。すると後ろから女性の声が出た。

「こーら。人のことをジロジロと見たりしない」

さっきまでレジにいたはずの店員さん 田所 美雪さんだった。

田所さんは巧の家の近所に住んでいる幼馴染のような感覚の人だ。

「み、見てないですよ」

巧は恥ずかしくなって手にしていたマンガで顔を隠した。

「見てたじゃない。気になったんでしょ、あの人たちのこと」

「……。」

巧も今年で15歳。中学3年生だ。周りの友達で付き合っている人だっている。恋愛とかもっと進んだ話とかに興味がないわけではないが、あまりそういうことを積極的に話そうとも思わない。そういう話をするにはどうも巧は抵抗があった。

「まあどっちでもいいけど……ひとつだけ聞いていい?」

美雪は巧の並んでいる少女マンガコーナーの棚の整理をしながら言った。

「なんですか？」

巧は適当に話を聞きながら一冊のマンガを手を取った。

『恋愛書店』

巧がいま一番ハマッているマンガである。もちろんおわかりのとおり、少女マンガだ。

巧は最近、急に少女マンガにハマリ始めた。ここ1ヶ月くらいの話だ。それにもかかわらず、家の部屋には既にたくさんの少女マンガが並んでいる。この間、兄貴にそれを見られたときには正直かなり焦った。兄貴は苦笑いしながら言った。

「お前って意外と女々しいところあるんだな」

あの時は顔から火が出る思いをした。それでも、あの人のオススメ（だと聞いた）だから仕方がない。読んでみたら本当に面白かった。

「聞いてる？」

美雪の声でふと我に返った巧は「ええ、聞いてますよ」と答えた。実際にはほとんど聞いていなかったけど。

「じゃあ、率直に聞くわね」

美雪がトントン、と3冊の本を整えながら続けた。

「君、好きな子いるでしょ？」

「んなっ……！」

巧の顔があっという間に真っ赤になった。

「あ、凶星？」

美雪がニヤツと少し意地悪く笑った。巧はプイツと美雪から目を逸らして「変なこと言わないでください！」と手にした『恋愛書店』に顔を埋めた。

「やーねえ。冗談なのに。そんなにムキにならなかつて……」

ピンポン、と音がして店内にお客さんが入ってきた。

「いらっしやいませー！」

美雪はすぐに営業モードに戻ってレジへと走ったので、巧は胸をなでおろした。これ以上妙な詮索はされなくなかったので、安心だ。巧はそのまま『恋愛書店』の新刊を手にとった。もうこのマンガも5巻まで出ている。どういふストーリーかって？

まあ恥ずかしくなるけどあらずじを説明しよう。

二人の男女がいる。高校生だ。二人は毎日、駅前の本屋さんに通ってはいろんな本を探している。店員さんも、偶然にしてはできすぎだななどと考えていたが、偶然はさらに重なる。いつも女子高生が探す本は男子高生が選んだ本なのだ。カウンターでいつも男子高生が買った本が在庫がないか聞いてくる。単に後を追っているだけかと思えばそうでもない。たまに男子高生が女子高生の買った本が在庫がないかどうかを聞いてくることもある。そんな話を店員さんからお互いに聞かされ、やがて二人は出会う。話をするにつれて、二人の価値観や趣味だけでなく、血液型、辿ってきた境遇まで似てくることに気づき。

ここまですで4巻のあらずじ。ありがちといえばありがちなストーリーかもしれない。しかし、店の状況やその舞台が自分の住んでいる町の周辺にそっくりだったので、ついつい手に取った。いや、実際にはそういう話を耳にして本当にそっくりで驚いたので、買ってみたのだが。

さっきやってきたお客さんが巧とは反対側のコーナー、つまり少年漫画のコーナーへやってきた。

身長は巧と同じ160センチくらい。

意外と長髪？

どんな子かについてい気になって覗き込んでギョツとした。

自分と同じ中学校、しかも女子生徒の制服だった。

(マズい！)

巧の通っている瀬戸中央中学校は駅前から少し離れた地域にあるので、市の北側に近いこの本屋さんにはあまり同級生が来ないと踏んでいたのだ。実際、ここに通い始めて1ヶ月近く経つが、まだ一

人も同級生を見たことはなかった。行く途中で出くわしたこともないのに、なぜよりのよって店内で出くわすのだろう。

（俺が少女マンガ読んでるなんてバレて女子に言いふらされでもしたら……）

巧はサッカー部に所属している。ストライカーとして結構女子生徒からも人気があるし、男子にも友達が多い。身長こそ低いけど、サッカー部では重要なポジション。そんなことはいま関係なく。クラスでも男らしくていい、と人気があると友達から言われた。

そんなイメージを持たれているのに、ここでぶち壊すわけにはいかない。巧はコッソリ店を抜け出そうとして『恋愛書店』を置いてゆっくり歩き出した。

「ん？」

急に女子生徒が声を上げた。心臓が飛び上がる思いがしたが、さらに焦る要素が生まれてしまった。

（この声……和泉じゃん！）

声の持ち主は学年でも結構カワイイと人気がある小学生時代からの友人にしてクラスメイト 和泉 いずみ 智里 ちさと だった。

そして、巧の憧れの女子生徒でもあった。

（最悪だ……！ バレないように、ゆっくり、ゆっくり……）
ちょうど柱の陰になっていて通り道は智里からは見えないはず。

「この香りって……」

智里は覚えのあるワックスの香りがしたので、そのまま手にしていた漫画を置いて柵の後ろを覗き込んだ。

「ゲッ！」

巧が驚いた声を上げて動きを止めた。

「あー！」

智里もついつい声を上げてしまった。

「……………」

「……………」

沈黙が続く。巧は冷や汗が大量に出てきていた。

(最悪だ……！まさか智里だなんて……)

「たつくんじゃない」

智里はニッコリ笑って懐かしい呼び名で巧のことを呼んだ。「たつくん」と呼ぶのは智里くらいしかいなかった。

「よ、よお」

智里は巧の真上にある案内板を見た。間違いなく少女マンガコーナーとある。

「あー！」

巧の顔があつという間に真っ赤になる。

「ち、違うんだよ！俺はえっとその、なんていうか……」

「好きなんだ？」

「え？」

「少女マンガ」

「……うん」

言ってしまった。

もう見つかっているから今さら恥ずかしがっても仕方がないと思
い、言ってしまった。

「いいよね、少女マンガ」

智里はニッコリ笑って巧の横に立った。リンスの香りだろうか、
智里の髪の毛からいい香りがする。

(ってこれじゃ俺、変質者じゃん!?)

巧はまた顔を赤くした。

「ねえ。これなんてあたしのオススメだよ」

智里が手にしたのは『恋愛書店』だった。

(知ってるよ。お前がそれを全部持つてるって言ったから、俺だっ
て買ったんだ)

「一度、読んでみない？」

智里はそうとは知らずに『恋愛書店』の1巻を巧に手渡した。

「うん」

巧は微笑みながら1巻を手にした。

「ねえ。たつくんはオススメの漫画ない？」

智里は歩いて少年漫画のコーナーへ立った。巧も後を追う。

「最近ね、スゴくみんなと話を合わせるの大変なんだ」

「え？」

少し悲しそうに智里がうつむいた。

「みんなね、もう少女マンガなんて卒業だよ、とか言ってるの。

バカらしくって読んでないって。同じようなストーリーばかりだもあって」

「そ、そうなのか？」

「ううん。あたしはそうは思っていないよ。みんなどの漫画家さんも一所懸命書いたんだから、全然そんなことないと思ってる」

そうだ。どんな漫画も小説も、駄作とか他人から言われても作っただ人にしたら一所懸命やった自分の大切な作品だ。そこまでけなされる筋合いもないだろうという気もするし、けなされたならもつとやってみよう！とも思ってた。ほしい。

「最近、みんな少年漫画読んでるんだって」

「え？ 女子が？」

意外だった。少年漫画って女子に人気あるの？

「うん。少年ジャガジンの『ストライカー』とかね」

「ああ……そうなんだ」

『ストライカー』。

サッカー漫画だ。巧がずっと前から愛読している漫画。クラスメイトとことあることにそれで盛り上がりつつあった。

「サッカー部のある人が読み始めて、それを聞いたみんなが読み始めてるみたい」

「ある人」が誰なのか、直接は智里は言わないが巧はそれが誰なのか知っている。紛れもない自分だ。

自分のせいで智里を傷つけた？

それは考えすぎか。

「だからね、あたしも最近読み始めたんだ。『ストライカー』」

「えっ？ マジで？」

「うん。ちよつとでも付いていけたらいいなつて」

智里は巧に向かってニツコリ笑った。正直ドキツとしたが、話の流れから言つて「付いていく」のは智里の「友達」にだろう。巧にはではない。

「そつか。大変だな、友達付き合いも」

「うん……まあね」

沈黙が続く。

「じゃあ、俺はこれ買つよ」

既に持っている『恋愛書店』の1巻を片手に、巧はレジへ向かった。

「それじゃ、あたしは新刊の7巻買つね」

智里は右手に『ストライカー』の7巻を持ってレジへ向かった。

「ありがとうございました」

美雪の声を背に、二人は店を出た。

「雨、止んだね」

「そうだな。夕焼け、綺麗じゃん」

西のほうに、雨のおかげで澄んだ空気に輝く夕日が見えている。

「そろそろおなか減つてきたし、帰ろつか」

「おう。そうしよつか」

巧が自転車に跨り、智里も自転車に乗ろうとして智里が声を上げた。

「やだ……！ パンクしてる」

「え？ どれ、見せてみるよ」

巧は智里の自転車のタイヤの状況を調べた。結構ひどいパンクだ。どうやらタイヤ自体が寿命だったらしい。

「ダメだこりゃ」

巧は少し黒くなった手で汗を拭いた。

「ちよつと待つてて」

巧は店内に戻り、美雪に事情を説明した。すぐに美雪も出てきた。
「ああ、なるほどね。こりゃダメだわね」

美雪も諦め気味に言った。

「それじゃあさ、美雪さん今日悪いけどチィ……智里のチャリ預かっててくれん？」

「構わないけど……その子はいいの？」

美雪が心配そうに智里のほうを向いた。

「あ、自転車なら大丈夫です。でも、よろしいんですか？」

「ああ！　ウチの店のことは心配しないで。店長に私から言うからおから」

「すいません。それじゃ、明日また引き取りに来ます」

智里はお辞儀をして、そのまま巧の自転車の横を歩き出した。

「気をつけてね！」

「はい！　またね、美雪さん」

巧は軽く手を振りながら、逆光で顔がよく見えない美雪に挨拶をした。

しばらく行った交差点で、巧が急に言った。

「乗れよ」

「え？」

「後ろ。乗れよ」

「でも、わたし重いし……」

「サッカー部の脚力、なめんな？」

巧はニツと笑って自転車の後ろを指差した。

「それじゃあ……失礼します」

智里は恥ずかしそうに後ろに腰掛けた。

「それじゃ危ないだろ」

「え？」

智里の足は両方とも左へ飛び出している。

「ちゃんと跨って、俺の体に手え回せ」

「でも……」

「落ちたりぶつかつたりしたら危ないからな。早く」

「わかつた……」

智里はそつと乗りなおして、巧のおなかあたりに手を回した。

「それじゃ、出発進行〜！」

巧はすぐに軽々と自転車をこぎ始めた。

智里の手に、少し引き締まった巧の腹筋の感覚が伝わってくる。

昔、小学生の頃に一緒に自転車で乗ったときは痩せていたのに。ずいぶん変わってしまった。

10分足らずで、智里の家へ着いた。

「どう？ 早かつたろ？」

「うん……今日はありがとう」

「こちらこそ。それじゃ、また明日でも一緒に本屋にチャリ取りに行こうぜ。またお前ん家、誘いに来るから」

「わかつた」

「じゃあな！」

そう言つて巧はすぐに自転車をこいで走り去ろうとした。

「待って！ たつくん！」

「ん？」

「良かつたら、明日にでも『恋愛書店』の感想、聞かせて！」

「おう！ 今日中に読んでおくよ！」

巧はニッコリ笑つて手を振った。

「じゃあな！」

「バイバイ！」

すぐに巧の姿は見えなくなつてしまつたが、智里はいつまでも巧の走つていった方角を見つめていた。

02・少年漫画 少女マンガ(後)

(どうしよう……持ってきてしまった)

巧は校門の近くに着いてからになって心臓がドキドキしてきた。もう一度『恋愛書店』を1巻から(智里から薦められた1巻は封を切ってもいない。家にあつた分)読み直した。読めば読むほどやっぱり深みのある作品で、意外と止めることができずに夕飯の後もずっと家のソファに寝転がって読んでいた。兄貴には「またその本かよ」と茶々を入れられたが、そんなことは関係ない。細かくコマの隅々まで呼んでいたら、ようやく2巻まで読むことができた。絵の描写も細かい。

しかし、細かい部分を読んでいたが故に読みきることができず、ついに次の日へ持ち越しとなった。ただ、昨日は日曜で部活がなかったから良かったものの今日からはバツチリ部活だ。なかなか読む時間が取れなくなってしまっただろう。しかし続きが気になってしまい、とうとう学校へコッソリ持ってきてしまった。こんなことをするのは初めてだ。

(まあ、バレないように読めば……)

今の巧の座席は教室の一番後ろ。先生にも同級生にもバレにくい位置だ。変にオドオドしなればまったく問題はないだろうと思っ
ていた。

「おはよう！ たつくん」

後ろから智里が小走りやって来て、声をかけた。

「おう！ おはよ、智里」

「今日も暑いね」

「ああ。やっぱり夏だな」

「こんなに暑いのに、やっぱり今日も部活？」

「まあな。暑いから寒いから今日は部活ない！なんてのはサッカー部にはなかなか無い話だよ」

「そうなんだ……大変だね」

「好きでやっつてることだからな。大変と思ったことはないぜ」

「たっくんらしいや」

智里はクスツと笑った。

智里とこんな風に話すのはずいぶん久しぶりのような感じがする。中学に入って、1年生のときはクラスが別。2年と3年のときは一緒になっているものの、お互い妙に意識してなんだかよそよそしくなってしまうていた。

(『恋愛書店』のおかげか?)

ククツと思わず笑ってしまった。

「どうしたの?」

智里が首を傾げて巧の顔を覗き込んだ。

「いや! なんでもねえよ」

巧はなんとか平静を装った。

「ねえ! 見て」

智里が彼女のカバンの中を指差した。中を見ると、『ストライカー』の7巻が入っている。

「コッソリ授業中に読むの」

クスツとまた智里が笑った。

「俺も」

そういつて、巧もカバンの中を見せた。

「お互い授業中、バレませんように」

「ホント、それだよな」

二人は靴を履き替えながら笑い合った。

5時間目のチャイムが鳴った。

(よし……バレずに4巻まで突入! 明日中には昨日買った6巻までに辿り着けそうだなあ)

巧はこっそりカバンから4巻を取り出した。

チラツと智里のほうを見ると、数学の教科書に隠しながらうまく

読んでいる。

ふと目が合った。

(うまくやってるね?)

智里が口パクでそう言ったように思う。

(お前もな)

(また後で感想教えてね)

(もちろん)

ニコツと智里は笑って再び『ストライカー』に目を戻した。

10分ほど経った。

つつい巧はマンガに夢中になって、周囲に目を向けていなかった

「三嶋」

数学の谷沢先生の声がしたので上を向くと、怒った様子で巧を見下ろしていた。

(ゲツ……)

「何を讀んでる?」

「……。」

「見せなさい」

しかし、巧は俯いたまま動こうとしない。

パシツと音がして、巧の数学の教科書が床に落ちた。そして、巧の手に握られているマンガを谷沢先生は取り上げた。

「なんだ、これは?」

それでも巧は反応しない。

「答えられないなら答えてやろうか? 代わりに」

「マンガです」

智里が心配そうにこちらを見つめている。他のクラスメイトも巧のほうを見てヒソヒソと何かを話している。

「なんでこんなものを授業中に読む必要がある?」

「……。」

巧はずっと下を向いたままだ。

「聞いているのか?」

「……………」

「聞いてるのかと言ってるんだ！」

バン！と激しい音がして、巧の机の上のノートや筆箱が転げ落ちた。

「しかもなんだ、お前」

隠していた本屋さんで巻いてもらうカバーを剥ぎ取られて、ピラピラと表紙をクラスメイトが見える位置で谷沢は振った。

「少女マンガじゃないか」

「……………」

巧の顔があつという間に赤くなるのが遠くにいる智里でもわかった。

「マジかよ？ 見るよ、巧が少女マンガ読んでるんだってよ！」

「うそ〜？ 三嶋くんが！？」

「信じらんない……………子供っぽいんじゃないの？」

「笑っちゃうなあ！ 俺ん家の姉ちゃんももう読んでないぜ？」

谷沢は嫌味つたらしい口調で続けた。

「三嶋〜、お前サッカー部でエースストライカーとかっていうことで人気あるそうじゃないか？」

「……………」

「そのわりになんだ〜？ 意外と女々しいんだなお前。こんな本を中3にもなって読んでるのか」

巧の腕がプルプルと震えているのに気づいたのは、智里だけのようだった。

「アレじゃないのか？ お前は家に帰ったらお人形さん遊びとかやって……………」

バン！

巧が勢いよく立ち上がった。同時に椅子が後ろへ倒れた。

教室が一気に静まり返る。

「……っさい」

「なに？」

谷沢が恐る恐る聞き返した。

「うるせー！」

そのまま巧は外へ飛び出して行ってしまった。

「たつくん！」

慌てて智里も立ち上がって後を追った。

智里の机から『ストライカー』の7巻が落ち、表紙がパラッとめくれた。

「たつくん！ 待って、たつくん！」

智里は大声を上げて巧を追いかけた。しかし、サッカー部のストライカーだけあってあつてあつという間に姿が見えなくなってしまった。

「えっと……えーっと」

智里は迷った挙句、屋上へ向かった。屋上へ上がると、息を切らした巧がハアハアと言いながら座り込んでいた。

「たつくん……」

ポタツと巧の頬から何かがこぼれおちた。初めは汗だと思っていたが、肩が震え始めていたので泣いているのだと気づいた。

「もうイヤだ……」

そつと智里は巧のそばへ座り込んだ。

「疲れてるんだ、正直……。エースストライカーだからとか、人気があるからだとか、がんばれとかもう全部……」

「……。」

智里は何も答えない。それでも巧は話し続けた。

「そんなマンガみたいにうまくいかないんだよ、現実なんて」

「……そうかもしれないね」

「でも、現実がうまくいかないから、マンガに俺は息抜きを求めて

「たんだ」

「その気持ち、わかるよ……私もそうだったから」

「え？」

「智里はまっすぐ前を向いたまま、続けた。」

「あたしね、好きな人いるの」

「……。」

「いきなりゴメンね、こんなこと」

「いや、いいよ……続けて」

「うん。ありがとう」

「サアツと夏にしては冷たい風が吹いた。どこかで夕立が降っているのかもしれない。」

「私の好きな人ね、笑顔がステキなの」

「そうなんだ。智里、笑顔がステキな人が好みって言ってたもんな」

「うん。でも、この中学校ってサイテーだよ。なんか下品な男子多いし、汗臭いやツとか多すぎ！ もう失笑だよ」

「ハハハ……確かに、俺の部活でもそういうヤツ多いしね」

「でもね、その人は違ったんだ」

「智里が急に嬉しそうに笑った。」

「その人、なんかスゴい選手らしいんだけど全然プレッシャーとか感じさせない感じでね。すごいがんばってるのが伝わってくるの。あたし、取り柄なんてないけど……その人と同じ学校でその人の姿を見ていたらがんばろうって気にさせてくれたの」

「巧の心臓が高鳴り始めた。」

「でもさ……やっぱり誰にでも弱いところってあるよね。あたしの場合、自分に自身が持てないところ。その人は……」

「弱音を吐かないところ」

「……え」

「だろ？」

「……うん」

「でも、俺、弱音を吐いていないわけじゃなかったぜ」

「そ、そうなの？」

「ああ」

そういって、巧はポケットから『恋愛書店』の未開封の1巻を取り出した。

「これを見つけて……知ったおかげで、少し強くなれた」

「それって……」

「智里……チイちゃんがこの本読んでて、面白そうにしていたから、読んでみた。面白かった。何より、夢があっという」

「……」

「でも、現実逃避じゃないんだよな」

巧はゴロンと寝転んで空を見上げた。少し曇っているが、たいして気にならない。

「夢を持たせてくれる。マンガも、小説も、雑誌も何でも」

「そうだね。あたしも、そう思う」

隣に智里も寝転んだ。

チャイムが鳴り響いた。

「5時間目、終わっちゃった」

智里が小さい声でつぶやいた。

「そだな。シマンチュに怒られそう」

シマンチュとは担任の島田先生のこと。

「ま、こういう日もいいんじゃない？」

「そだな」

クスツと二人は笑い合った。

「そろそろ行こうか」

智里が起き上がるうとした瞬間、隣から「チイ」と声がした。

「え？」

横を向くと、唇に巧の唇が触れた。

「……俺とずっと一緒にいてくれる？」

「そ、それって……」

「一緒にいて、俺にもっと夢を与えてほしい」

まぶしくて巧の顔が見えない。

「付き合って……ください」

立ち上がって、巧はハッキリと言った。

「ハイ」

智里が半泣きになって返事をする、巧も涙目になりながらギョッと抱きしめてきた。

「キャッ！」

智里の見ているほうに、団地に住んでいるらしいオバサンと目が合った。

「ねえ……人が見てるよ」

「関係ねえよ、そんなの」

「……ありがとう」

巧の手から落ちた『恋愛書店』の1巻が、二人の姿をジッと見守っていた。

03・仮面と麝香くジャコウく(前)(前書き)

注 本当に微妙ですが、イジメが関わっている物語です。それほど激しい描写はありませんが、それを念頭においてお読みください。

03・仮面と麝香くジャコウく(前)

「ああ、驚いた」

有働智恵子はベランダから戻ってくるなり大きくため息をついた。

「どうしたの？ お母さん」

娘の由貴が布団から顔を出して聞いてくる。

「なんでもないのでよ。それより、アンタ熱は下がったの？」

「ううん。まだ気だるい」

由貴は昨日から発熱で学校を休んでいる。元気が取り柄だった娘が急に熱を出したことに智恵子は少し驚いたが、由貴も人間だ。そういうことだってあるだろう。

「じゃあお母さん、今からお買い物に行ってくるから、何か欲しいものある？」

「マスクメロン」

「バカ言わないで。そんなこと言う元気あるんだったら学校行ってきなさい」

智恵子が笑いながら買い物物の支度を始めた。

「じゃあリンゴゼリーがいいな。甘いヤツ」

「アンタは小さい頃から好きね、リンゴが」

「想い出もいろいろあるしね」

「恥ずかしそうに由貴が呟いた。

「わかったわ。買ってくるからお留守番ヨロシクね？」

「はあ〜い！ 行ってらっしゃい！」

バタン、と音がして智恵子が買い物へ出た途端、由貴の胸がチクリと痛んだ。

熱なんて嘘。

学校へ行きたくないだけ。

それは突然始まった。

「ねえ、アンタなにい子ぶってんの？」

クラスでいつも中心になって動いている、女子が今度は由貴に向かつてそう言うてきたのは一昨昨日なふとこじのことだった。

「えっ？」

「学級委員長だからって、いい子の仮面でも被ってるわけ？」

「そ、そんなつもりじゃ……」

「見てて、ムカツク」

そこから由貴の日常は一変した。

机に落書きは当たり前。上履きがなくなる。シャーペンや消しゴムが粉々になっている。誰もじきに口を利いてくれなくなり、まるで由貴の存在が消えてしまったかのようになってしまった。

それでも学校へ行かないわけにはいかない。しかし、体は正直だった。

昨日になって急に微熱が出るようになった。それも朝。37度3分。微妙な熱だ、本当に。智恵子は大事をとって休ませてくれた。これほどホツとしたことはなかった。昼過ぎになれば熱は下がり、食欲も戻った。これなら明日から行けるわね、と言われたときにはウンザリしたけども。

ところが今朝。今度は37度4分の熱。

「ぶり返しちゃったのかしらねえ……」

医者へ行ったほうがいいと智恵子は言ったが、今日は月曜日。あいにいくいつも行っているかかりつけの病院は休診日だった。

「今日もおとなしく寝ているに限るわね」

そして、今に至るわけである。

「なんか……罪悪感」

由貴はため息をついた。

外では蝉が鳴いている。

「それにしてもさっきの中学生には驚かされたわあ」
智恵子はエレベーターホールで独り言を言っていた。さっきの中学生、授業中のはずなのに屋上に出て抱き合っていた。
いつだったか、14歳の女の子が妊娠するというようなドラマをやっていた。まだ由貴が小さい頃だった。といっても小学校4年生のころだが。

「最近の子は大胆ねえ……私たちの頃には考えられないことだわ」
2機あるエレベーターの1機が7階に到着したので智恵子は乗り込んだ。発車と同時に入れ違いでもう1機のエレベーターが7階に滑り込んできた。

「えっと……この7階だよね」

蓮沼 一樹はすめま・かずきは大きめの箱を片手にエレベーターを降りた。

「705号室……と。あつたあつた」

「もう一眠りしようかな……。眠れないけど」

由貴が布団にもぐりこんで目をつむった途端、インターフォンが鳴った。

（まさか……家にまで？）

由貴は恐る恐る覗き穴から表を覗き込んだ。

「!?!」

大きな目が映っている。どうやら相手がこちらを覗きこんでいるらしい。

（違うよ、用途が）

しかしいつまでたっても目を離してくれないので由貴はしびしび玄関が一番近い部屋の窓から誰なのかを確認した。

「あつ!」

クラスメイトの、蓮沼はすめま 一樹かずきだった。

「蓮沼くん!? なんで!?!」

由貴は慌ててパジャマを脱いで私服に着替え、髪を整えようとし

て気づいた。自分は病気で欠席ということになっている。

「ああ、ダメだ！ こんな綺麗な格好して出たらズル休みって思われちゃう……。ああでもこんなみっともない格好で……。出られない」
でもよく考えれば。

「ちよつとくらいボロボロのほうが病気らしくって……。いいかも？」
そしてそれをキツカケにもつと優しくしてもらっちゃったりして
！！

「キヤーツ！ このまま！ ボロボロのままでもいいや！」

「あれ？ ひよつとして寝てるのかなあ」

一樹はもう一度（使い方を間違えているが）覗き穴を覗き込んだ。
同時にドアが開いて、思いつきりそれが一樹の額に当たった。

「あいでっ！」

「キヤツ！ ごめんっ！」

一瞬記憶が飛んだが、すぐに一樹はドアの内側から現れた由貴を見てニツコリ笑った。

「体調どう？ 有働さん」

（キyun死に〜！）

由貴は一人でメロメロになっていた。

「どうしたの？」

一樹が不思議そうにこちらを見つめている。あまり変なことは考えていられない。

「あ、えつと……。どうしたの？」

わかりきっていることをあえて由貴は聞いた。

「お見舞いにきました」

ニツと笑うと細い目がますます細くなった。

「入って！」

「へっ？」

「いまお母さんもないし！ 入って入って！」

由貴に押されるがまま、一樹は部屋の中へ入っていった。

「有働さん……」

「なに？」

「病気なんだから、寝てたほうがいいんじゃない？」

「あつ！」

一樹が来たのであまりの嬉しさに紅茶を準備している自分が恥ずかしくなった。

「そうだね、うん。私、病気だった」

「あとは俺がするから」

そういつて由貴と交代で一樹が台所に立った。

一樹は学校でレスリングをやっている。身長は185センチもあるし、体重は80キロ近いらしい。しかも見た目が坊主頭で一重なもんだから、かなり威圧感がある。でも、芯は優しい人だ。以前、由貴が階段から誤って転落したとき、その体を生かして守ってくれた。もちろん、本人も怪我なし。それ以来、仲良くしている。

「……………」

手際よく調理する一樹。今日は制服のカッターシャツ姿だが、その下からでも鍛えられた筋肉の形が浮き出ている。

「なに考えてるんだろ……私のバカ」

「え？　なんか言った？」

紅茶をお盆に載せて一樹が帰ってきた。

「うっん！　なんでもない！　それよりありがとう」

「いいってことよ。それより、俺も見舞いの品持ってきたから一緒に食べようぜ」

「えっ？」

よく見ると、お皿に乗っているのはマスクメロンだった。

マスク。

仮面。

(学級委員長だからって、いい子の仮面でも被ってるわけ?)

アイツの声が蘇ってくる。

「有働さん?」

「!」

一樹の声に我に返った。

「どうしたの? 熱、また出てきた?」

心配そうに由貴の顔を覗き込む一樹。ドキッとしてしまう。こんなに一樹の顔を近くで見たことはない。

「ううん……なんでもない」

「そう……」

しかし、一樹はまだ視線をはずさない。

(えっ!?)

そのまま一樹は目をつむり、口を由貴のほうへ寄せてきた。

(ちよ、うそ!? あ……)

無抵抗のまま、一樹の唇が由貴の唇に重なった。

「……これで風邪、治るよ」

「は？」

「俺が風邪、もらったから」

「……。」

「ちょっとクサかったかな？」

あつという間に一樹の顔が赤くなる。

「全然！ おもしろいね、蓮沼くん」

由貴がクスクス笑っていると、急に何か重いものが乗りかかってきた。

「ふえ！？」

由貴をギュッと抱きしめている一樹の姿が目に入ってきた。そして、一樹がそのまま制服のボタンを外している。

（はい！？）

その服の下から、一樹のガツシリした胸板が見えた。

（はわわわわわ！ あわわ、ちょ、待って！ なに考えてんのよお！）

「ストップ！」

次の瞬間、由貴は思いっきり一樹の頬をはたいていた。

「あつ……」

「……痛って」

低い声で一樹が立ち上がる。

「じ、ごめんなさい……」

「……ダメなのか？」

制服が半分脱げた状態で、一樹が寂しそうに言った。

「ダメって……決まってるじゃない」

「キスはいいのに？」

ボン！と音を立てたかのように由貴の顔が赤くなった。

「最低！」

思いつきり一樹に枕を投げつけた。バシッ！と音を立てて一樹の顔面に枕が直撃した。

「優しそうな顔して急にあんなことして……。男ってみんなそうなの？ 優しそうな仮面つけて実はエッチなことばかり考えてるんでしょ！？」

一樹は顔を由貴以上に赤くして立ち尽くしている。はだけた制服のボタンを留めて、立ち上がった。

「悪かった」

一言そういつて、玄関へと歩き出した。

「でもよ、有働」

最後に振り返り、言った。

「お前も仮面、つけてたんじゃねえの？」

「……つけてない」

「……我慢のしすぎは良くないぞ」

そこから先は、答えなかった。

ボタン、と音がしたあとは静寂が由貴を包み込んでいた。マスクメロンの強い甘い香りが由貴の鼻に届く。

「全部バレてんじゃん……ハハハ」

由貴は一樹が用意してくれたマスクメロンを口にした。

甘いはずなのにしょっぱかった。

03・仮面と麝香くじャコウく(後)(前書き)

注 この作品には本当に微妙ですが、イジメに関する描写があります。それを念頭においてお読みください。

03・仮面と麝香くジャコウく(後)

「あら、横田さん！」

智恵子は近所に住んでいる主婦仲間・横田まみ子よこたこをスーパーのレジで見かけて声をかけた。

「あらあ！ 有働さん！ どうしたの、こんな時間に！」

まみ子は近所でも有名な男勝りのオバサンとして有名だ。智恵子より4つ年上。

「いやね、娘が昨日から熱をちよつと出してて……。それでゼリーとかを買いにきたのよ」

「あらまあ。いけないわねえ。夏風邪かしら？ 気をつけないと長引くわねえ」

「ホントに。まったくただでさえ普段から手がかかる子なのに疲れちゃう」

「アハハハハ！ 子供がいるだけでアンタ幸せなんだから、そういうこと言わない！ 見てよ、行かず後家のあたしなんてもう50歳よ〜！」

「行かず後家つてまたまた。横田さん、声がデカいわよ」

「あらヤダ！ あたしとしたことが。アハハハハ！」

まみ子の笑い声がスーパー中に響いた。

帰り道、まみ子はいつになく真剣な表情で智恵子に話し始めた。

「ねえ、有働さん」

「なあに？ 珍しいわね、怖い顔して」

「最近の学校でのイジメ問題、どう思う？」

「イジメ問題ねえ……かなり深刻よね。娘も高校に通ってるし、息子も今年から中学生。二人とも明るいから大丈夫とは思っけど、気をつけてあげないと」

「そう！ その明るいつてというのが意外と危ないんですってよ！」

「え？」

まみ子は事細かに教えてくれた。

最近のイジメのタイプが変わってきていること。明るく、目立つ子ほどイジメを受けやすくなっているらしい。イジメの発端はくだらないことが多いが、なぜか成績のいい子、運動が良くできる子、それまで明るくてひょうきんで人気者だった子などが集中的に狙われているらしい。

「おたくの由貴ちゃんも聖一くんもよくできるでしょう。気をつけてあげたほうがいいわよ」

「そうね……これから気をつけてあげないと」

智恵子は改めて子供たちに気を配ってあげようと心に決めた。

「ただいま」

智恵子が帰ると、由貴が台所で洗い物をしていた。

「あら、由貴。体調は大丈夫なの？」

「うん……」

「ホラ、まだしんどそうな声してるじゃない。寝てなさい」

「うん……」

「リンゴゼリー買ってきたから食べなさい」

「うん……」

ずっと同じ返事。少し様子がおかしい。気にしすぎだろうか。

買い物袋を置いて炊事場へ立つと、まな板の上にマスクメロンがあるのに気づいた。

「あら！ マスクメロンなんて高級なもの、どうしたの？」

「友達がくれた」

「まあ！ なんていう子？」

「蓮沼くんっていう子」

「初めて聞くわね。こんな高級なもの、良かったのかしら」

不意に、由貴がギュッと智恵子に抱きついてきた。

「ど、どうしたの？」

「……なさい」

「なに？ ハッキリ言ってくれないとわからないわ」

「ゴメンなさい、お母さん」

震えながら涙を流し、由貴は言った。

「私、学校でイジメられてるの。だから、学校を休んだの……」

「本当なのか？」

父親の武が由貴に聞いた。

「本当……」

由貴はヒックヒックと言いながらも答えた。

「いつからなの？」

智恵子も泣きそうな声で聞いた。

「1週間くらい前……」

「どうしてもっと早く言ってくれないの」

「お母さんやお父さんに余計な心配、かけたくなかったから……」

「……由貴」

武がポン、と優しく由貴の頭を撫でた。

「子供はな、親に心配かけたくなかったか迷惑かけたくないって思わなくていいもんだ」

「でも」

「子供はな、親にとってはいつまでも子供なんだ。就職して自活していけるようになって、結婚して苗字が変わっても、子供ができて、由貴も聖一もお父さんとお母さんの子供なんだ。いつだって相談しなさい。いつだって、頼りにしてきなさい。わかったか？」

「……はい」

「よし。母さん、すぐに学校に連絡を」

智恵子が立ち上がって電話をかけようとして、由貴が遮った。

「待って！」

武と智恵子が思わず動きを止めた。

「私、自分で解決したい」

「でも、いま言ったように迷惑だとかじゃないんだぞ？」
由貴は首を静かに横に振り、言った。

「私、一人じゃないから」

そういつて、携帯電話を取り出し電話をかけ始めた。

「ん？」

ポケットでバイブを鳴らしながら電話がかかっていることに気づいた一樹は筋力トレーニングを止めた。

『有働』

出ようかどうしようか迷ったが、思い切って出た。

「もしもし」

『もしもし？ 蓮沼くん』

「おう」

『今日はゴメンなさい』

「いや、俺も悪かったし」

『私ね、ずっと嘘ついてた』

「え？」

由貴は一呼吸置いて、言った。

『私、学校でイジメられてるの』

これはいすべきなのか。

一樹は迷った。けれど、言わなければ一生後悔する気がした。

「俺も、嘘をついてた」

『え？』

「悪い、有働。お前がイジメられてるのを、見て見ぬフリしてた」

『……………』

由貴は何も言わない。罵られても構わないと思ひ、一樹は続けた。
「俺がイジメられるんじゃないかと思つて、知らないフリをしてた。」

でも、心配になって見舞いって形でお前に近づいて……少し弱々しくなってるお前を見てたらなんか抑えらんなくって……それで、その……」

これじゃ本当にエッチなことしか考えてないヤツだと思われてしまふ。でもいい。本当のことは全部言った。

しばらく由貴のほうから声が聞こえなくなった。でも、電話は切られていない。

不意に、突然声がした。

『好きです』

「えっ……?」

『貴方のことが、私は好きです』

一瞬、一樹のすべての思考回路が止まったような気さえた。

「有働……」

『イジメられてる弱い私でよかったら、付き合ってください』

「……。」

今度は一樹のほうから声が聞こえなくなった。

(やっぱダメか)

そう思ったときだ。一樹の低い声が返ってきたのは。

『死ぬ気で、君を守る』

それを聞いて、心臓が止まるかと思った。

「……蓮沼くん」

『意地でもお前を救って、幸せにしてやる。俺とお前の約束だ』

「……ありがとう」

『明日、絶対学校に來い。微熱があっても來いよ?』

その声はさっきまでの声とは違う、力のある声だった。

「はい」

由貴は嬉しさのあまり、涙声になっていた。

翌日。

由貴は教室の前に立っていた。今朝も微熱はあった。37度4分。それでも、勇気を振り絞って学校へ来た。

上履きは既に画鋏でいっぱいになっていた。それをすべてゴミ箱へ捨てて、いま由貴は教室の前に立っていた。

ガラガラガラッ　！

引き戸を開けると同時に、由貴をバケツいっぱいの汚れた水が覆いかぶさった。そのあとにガーン！と音を立ててバケツが頭頂部を直撃する。

「アハハハハ！ やだ、汚い」

あの女子生徒が笑う。クラスメイトも同じように嘲笑している。

「かわいそうに〜。有働、臭えなお前。俺がキレイに化粧してやろうかあ？」

女子生徒にイジめるよう指示をしていた彼氏　首謀者の岩井

寿明が黒板消しを由貴の頬に思いつきりぶつけた。

しかし、その2秒後には寿明は「グエツ！」と声を上げて教室の中央へと吹っ飛んでいた。

「は、蓮沼くん……」

一樹の表情は恐ろしいまでに怒りを抱えた表情になっていた。まだ高校1年生なのに、抜きん出て背の高い一樹にクラスメイト全員が凍りつく。

「どついつつもりだ？」

一樹はクラスメイト全員を一瞥する。

「弱い者イジメなんて最低だと思わねえのかよ！」

ガシャーン！と音を立てて一樹の前に並んでいた机と椅子が2つ

ほど吹き飛んだ。引き出しの中に入っていた教科書やノートが散乱し、クラスメイトが悲鳴を上げてその周りから離れた。

「今後この学校でイジメなんてやってみる。由貴に限らず、誰かをイジメたヤツは俺が実力でこの学校から追い出してやる」

寿明を睨みつけ、由貴をお姫様抱っこしながら一樹は教室を後にした。

「ねえ、あんな乱暴して大丈夫なの？」

屋上へやって来た由貴は心配になって一樹に聞いた。

「大丈夫だよ。イジメするようなヤツなんて案外心の弱いヤツだし。チクル勇氣なんてねえさ」

一樹がいつものように屈託なく笑った。

「ありがとね」

「いいってことよ」

そういうと一樹は制服のシャツを脱いだ。下はタンクトップを着ているようで、昨日とは見た感じが少し違う。けれど、体格は相変わらずいい。

「それ脱げよ。そんで、俺の服、着とけ」

「うん……」

「俺はあっち向いてるから」

「うん……」

屋上で由貴は着替え始めた。

「たまにはいいな」

「えっ？」

一樹が反対側を向いたまま、伸びをしながら言った。

「いい子ちゃんの仮面を取って、暴れるのも」

クスツと笑いながら、由貴は一樹のサイズでぶかぶかのシャツを着た。

少し汗臭い、けど安心する。一樹の匂いが由貴の鼻に届いた。

04. つめんね(前)

横田まみ子は自宅がある文化住宅の2階、201号室のドアを開けた。独特の古臭い匂いがしてくるがまみ子もこれにはそろそろ慣れてきた頃だ。

今年でまみ子も50歳。もうオバサンもいいところだ。

まみ子は独身だ。

別に、結婚が嫌だからとか恋愛をしなかったからとか縁がなかったからとかいう具合に言い訳をするわけでもなんでもない。

かつて、まみ子も結婚をした。もう25年も前の話。あの時若かった。若気の至りだったのかもしれない。独立して会社を作ったばかりの当時の旦那 という呼び方も嫌で、話に出てくるたびに「あの男」という呼び名になってしまふ と結婚した。うまくいくように二人で会社を切り盛りしてきた。30歳になってやっと子宝にも恵まれた。男の子だった。

しかし、その直後に人生のどんでん返しが待っていた。

あの男は、まみ子に内緒で借金を重ねていたのだ。

外回りと称してパチンコ屋で遊ぶ日々。もちろんそんなもので儲かるわけもなく、財産はドンドン姿を消していく。やがて消費者金融にあの男は手を伸ばし、気づけば会社は借金まみれ。当然のごとく、会社は倒産した。あの男は自己破産を申請し、まみ子と離婚。

まみ子は産んだばかりの長男、莊平と家を出てこの文化住宅へやって来た。最初はパートなどをしつつ莊平の子育てもしていたが、莊平の成長が思わしくない。同世代の子供たちと比べると身長も低いし体重も軽い。

小児科へ行くと、信じられないことを言われた。

「栄養失調気味ですね」

このご時勢に？

そんなことを思ってしまったが、莊平においしいご飯も飲み物も与えてあげられなかったことを考えると、致し方ないことかもしれない。

考えた。

考え抜いた。

なんとかこの子を私の元で育てられないか。

考えれば考えるほど、最悪の事態しか浮かんでこない。

結果として、養子へ出すことにした。

まだ1歳だった莊平は、寝ている間に養子先に出した両親に引き取られていった。

あの日、会社が破産してから初めてまみ子は泣いた。

そして、莊平がまみ子の手元から離れて20年が経った。

あの日と変わらず、まみ子は文化住宅に住んでいる。場所は転々としているけれど。本当は許されるべきではないが、養子に出した先のご夫婦から毎月お手紙をいただいている。莊平の成長の様子などを写真にして送ってくださったりもする。ふつうでは考えにくい対応をしてくださった。

今年、20歳になった莊平。

中学時代から水泳を続けてきたのもあってか、あの男とまみ子から生まれた子にしては背も高く（あの男は身長169センチ、まみ子は165センチ）ガツシリした体つきをしている。けれど、目元はまみ子に似て大きく優しい目だ。歯並びも幸い、まみ子似ではなくあの男のようにきれいに並んでいる。身長を除けば両親のいいところばかりを取って成長した子だ。

大学は入らずに、就職したと聞いた。

愛知県内で主に展開するアキオスーパーに就職したようだ。3ヶ月サイクルで働く店舗がいまのところ変わっているという。だいたいが決まった店舗に入れるようになるのは2年後のことだと当時、聞いた。

まみ子の近所にもアキオスーパーがある。さつき、有働さんとあった店がそれだ。昔は駅前のスーパーに行っていたからアキオスーパーへ行くことはほとんどなかった。しかし、有働さんに誘われてセールに行った3ヶ月前。まみ子は息が止まるかと思った。

「いらっしやいませ！」

レジでまみ子に対応した青年

林 莊平

紛れもなく、莊平だった。写真でしか見たことのない莊平が、まみ子の目の前にいる。就職してから水泳は続けているようで、体格は維持されている。しかし、生来の人懐っこさ（赤ちゃんの頃から人見知りは全然なかった）に加えて接客業で磨かれた挨拶の仕方などでオバサマを中心にお客さんの人気も高いようだった。

呆然とまみ子が莊平の姿を見つめると、それに気づいたらしい莊平はニコツと笑って「当店のご利用は初めてですか？」と聞いてきた。

「あ、はい。友人に呼ばれて来てみたんです」

「そうですか。今後ごひいきしていただけたら幸いです」

「はい……」

「ありがとうございます、2093円になります」

たった2、3分のやり取りだった。もう一度、名札を確認した。

『専属スタッフ 林 莊平』

専属スタッフ。

それはつまり、まみ子の近所のスーパーに配属が決定したということを示していた。

それからというもの、まみ子はアキオスーパーの常連客になっていた。莊平も次第にまみ子の顔を覚えて名前も覚えてくれるようになった。最近だと、声もかけてくれる。安い品物は今日はコレだとか、セールが来週あるとかいろいろなこと教えてくれる。

(なるほどねえ。これじゃオバサマ連中の気を惹くわけだわ)

もし仮に、まみ子の元で育っていたらこんなにいい子に育った気がしない。林さんのご夫婦には感謝しきれない。

翌日。

今日は有働さんが学校に娘の由貴ちゃんのことと用事があると聞いたので、一人でアキオスーパーへやって来た。

お菓子売り場でおかきの安売りがあると今日は莊平から聞いていた。

スーパーに入ると、莊平はお惣菜売り場で品物の整理をしていた。

「おはよう、林くん」

「おはようございます、横田さん」

(ああ、癒し系の笑顔ね)

まみ子は一人で感激していた。

「どうかしましたか?」

「ううん! なんでもないわ。今日も頑張ってたね」

「ハイ! ありがとうございます。横田さんも、ゆっくりお買い物楽しんでってくださいね」

「もちろん! それじゃあ」

ウキウキ気分でまみ子はお菓子売り場へと足を運んだ。5分ほどウロウロしていると、平日だというのに中学生くらいの男の子が同

じところをウロウロしているのにまみ子は気づいた。

(あらやだ、こんな時間に……。近頃の親ときたらどんな子育てを……)

次の瞬間、まみ子は目を疑った。

男の子が、お菓子をポケットに入れたのだ。

そしてそのまま男の子は店を出ようとする。まみ子は慌てて追いかけて男の子の腕を掴んだ。

「ちよつとアンタ！ なにやってんの！？」

腕を掴まれた男の子は焦った様子で腕を振りほどこうとした。

「あんだよ！ 離せよババア！」

「バツ……！」

まみ子は顔を赤くして怒り始めた。

「大人にそんな口利くなんて！ それにアンタがいまやったことは、犯罪なのよ！」

騒ぎに気づいた客が集まってくる。

「いいから離せよ！」

「キャツ！」

まみ子は思いっきり突き飛ばされて、派手に転んでしまった。

「待てっ！」

店員の一人と店長が男の子に思い切り体当たりして転ばせて動けないようにした。

「大丈夫？」

上を見上げると、莊平がまみ子の体を支えていた。

「え？」

「あ、いや、大丈夫ですか？」

莊平は少し顔を背けながら言った。

「あ……膝を擦りむいてますよ」

まみ子の右膝から少し血が出ていた。

「ああ！　こんなの、唾つけとけば治るわよ」

「いえ。当店で怪我をなさったことには変わりないですから軽くですが社員休憩室で治療しましょう」

「いってば」

「さあ、行きますよ」

まみ子は荘平に体を支えてもらいながら、社員休憩室へと入っていった。

04 じめんね(後)

社員休憩室の中で椅子に座らされたまみ子は物珍しそうに室内を見渡した。

「こういうところ、なかなか入る機会がないですもんね」

　　莊平は救急箱を探しながら話しかけてきた。

「ええ。こういうところがあるのは知ってるけど、こんな部屋だったのね」

「汚い部屋ですいません、ホント」

「いいのよ。ウチのアパートの部屋のほうがもっと汚いわ。あたし、掃除ヘタだからねえ」

「ハハッ！ それをいうなら俺のほうがヒドいっすよ。いっつも母さんに怒られてます。部屋を掃除しろ、掃除しろってね」

「そ、そう……」

　　‘母さん’という言葉聞いて、少し心が痛んだ。

　　莊平の母親は、林さんの奥さんである他になんでもないので。まみ子はいわば莊平を‘捨てた’ような感じだった。世話を仕切れなくなつたから、それを林さんご夫婦にお願いした。莊平を裏切つたと言つても過言ではない。

「あたしが、本当のアンタの母親だよ」

　　そう言えたらどれだけ幸せだろう。しかし、その一言は莊平のいまの生活、そして今までの生活や想い出すすべてを破壊する行為であることは間違いない。

　　このまま言わないほうが得策だ。

「ちよつとしみるかもしれせんよ」

　　救急箱から消毒液を出してきて、ティッシュで他の部分に垂れたりしないように押さえてくれている。ここまで気遣いのできる子に

なっているとすると、嬉しくて仕方がない。

思わず泣きそうになって、まみ子は目をギュッとつむった。

「昔……」

莊平が懐かしそうに話し始めたのでそちらに意識を集中した。

「昔、俺も足に本当にちよっとしたヤツですけど怪我したらしいんですよ。本当に小さな赤ちゃんの頃……」

まみ子の記憶が不意に鮮明に蘇った。

あれは20年前。

まみ子があのお男と別れて初めのアパートへやって来たその日のことだ。カッターナイフや鋏を入れたダンボールに莊平が近づいてきて、それを見事にひっくり返した。鋏の刃が小さくやわらかい莊平の足を小さく切ってしまった。

怪我はたいしたことがなかったが、驚いた莊平は大きな声で泣いた。

（大丈夫よ、大丈夫。お母さんが痛くないようにしてあげるからね）

それでも泣き止まない莊平に、まみ子は言った。

（莊ちゃん、目をギュッとつむってごらん。ホラ、お母さんみたいに）

まみ子がギュッと目をつむると、莊平もキヤツキヤツと笑ってマネをした。

「そう言ったんですよ、母親が」

「そう……。小さい頃の記憶って意外と残っているものなのね」それは紛れもない。まみ子と暮らしていたときの記憶だった。

「ねえ」

急に莊平の言葉遣いが敬語混じりのような感じでなくなった。

「横田さんも、同じじゃん」

「同じって……なにが？」

「泣きそつになつたときに、目をつむる」

「……？」

言おうかどうしようかためらっているのがわかる。しかし、莊平は口にした。

「俺の母親と、クセ、同じ」

一瞬、何も音が聞こえなくなった。

ドアの向こう側で続いているさっきの男の子への事情聴取。それに騒いでいるお客さんの声と雑踏。店のすぐ近くにある交差点の信号の音。車の音。何もかもが一瞬、聞こえなくなった。

しかし、そのクセが同じなのは林さんの奥さんのことかもしれない。

「あら！ そう！ 珍しいこともあるのねえ」

言えた。ごくごく自然に言えた。不自然なところは全然ない。

「……。」

莊平がポケットから一枚の写真を取り出した。

「横田さん。これね、俺が赤ちゃんの頃に母親と写ってる写真」

まみ子は冷静さを装って写真を受け取った

養子に出すとき、自分の小さい頃の写真がなかったら妙な疑いを持つてはいけないからと、まみ子やあの男の顔が写っていない範囲で莊平が写っている赤ちゃんの頃の写真を林さんご夫婦に渡しておいた。大丈夫。作戦はうまくいっているはず。

「カワイイわねえ！ 今のあなたもカッコいいけど、どおりでカッコよく育つハズだわ！」

「見て、ここ」

莊平は右足の膝の部分を指差した。

まみ子は高校生の頃、派手に階段から転げ落ちて右膝を大きく擦りむいたことがある。その傷は結局消えず、残ったままだった。

「さつき、傷テープ貼るときに見えた」

思わずまみ子はその部分を手で隠したが、すぐに荘平の手でそれを離されてしまった。

「もう一枚、写真を見て」

ゴクツと生唾を飲む音が聞こえそうなほど、辺りが静まり返る。

「俺の『いま』の母親に傷はない」

「……。」

こんなところで見破るとは。

我が子ながら驚きだ。

「ねえ、もういいだろ？」

急に荘平がまみ子に抱きついてきた。

「俺をだまそうったって、そうはいかない」

「……。」

「知ってるぜ。義母かあ）さんが母さんに毎月手紙を出してることくらい」

「えっ!?!」

「高校生の頃から知ってた」

「そんな前から……」

「だから就職した。母さんの家の近くにもあるアキオスーパーに。

研修が終わったあと、母さんがいる近くのこの店に異動願いを出した」

「そんな……」

「全部、偶然なんかじゃなかったんだ」

すべて見破られていた。

自分はどうか？

嬉しさのあまり荘平の働く店に通うようになっていた自分。荘平はすべてを知っていたうえで、あんなに優しく接してくれた。それ

なのに、自分はどんなのだろう。すべてを隠して、他人のフリを通してとしていたこと。

「ダメよ……」

「え……」

「あたしは、アンタの母親になんかなる資格、ないわ」

「なんで!?!」

　　莊平が半泣きになりながら聞いた。

「あたしは一度、アンタを『捨てた』のよ!」

「俺は一度だつてそんな風に思ったことはない!」

「アンタがなくなつて、あたしがそう思つちやつてるの! どうしようもなく会いたかつたけど、アンタを裏切るようなマネをしたあたしが受け入れられるハズないのよ、今さら!」

「……」

　　莊平が寂しそうにまみ子を見つめた。

「ごめんね、莊ちゃん」

　　そういつてまみ子は社員休憩室を飛び出した。

「待つて!」

　　莊平が止めるのも聞かず、まみ子は店を飛び出した。

翌日。

　　今日はアキオスーパーのセールの日だ。

　　しかし、もう顔を出せるハズもない。

　　まみ子はため息をついた。

「今日は燃えるゴミの日か……」

　　ゴミ箱からゴミ袋を取り出し、玄関のドアを開けて外へ出たときだった。

「今日はセールの日、ですよ」

振り向くと、莊平がいつものエプロン姿で立っていた。

「……。」

「ご案内します。ついてきていただけますか？」

「……はい」

まみ子は目をギュツとつむりながら答えた。

スーパーへ向かいながら歩く途中、まみ子が言った。

「今日、ウチへ来ない？」

「えっ？」

「汚いけど」

莊平がしばらく考えた様子で次に言ったのは、思わぬ発言だった。

「誘惑してんの？」

「バカ言うんじゃないの」

スーパーの入り口に立ったときにまみ子は続けた。

「あたしたちの今後を、しっかり考えたいの」

莊平は何も答えなかったが、ギュツとまみ子の手を握ってくれた。それだけで、答えをもらったような感じがまみ子にはしていた。

05・いいだろ、別に。(前)

「まったく……今年に入って何回目だと思ってるの」

瀬戸南中学校3年4組担任・的場まとは ちえは出席簿にボールペンをカンカンぶつけながらため息を漏らした。

教卓に伏せてまたため息。そして、その正面には担任をしている4組の男子生徒・木戸きと 亮平りやうへい。
「さあね。5回目くらいじゃね？」

亮平は悪ぶれた様子もなく無愛想な顔をして机に肘を突きながら答えた。

ちえは立ち上がって亮平の頬を思いっきり右手でつねった。

「痛てててて！ なにすんだよ！」

亮平は慌てて手を頬から離そうとするが、ちえは意地でも離さない。
い。

「だいたいね〜！ アンタはいつも反省の色が全然見えないのよ！」

「だって反省しないといけないほどのことをやってるとは俺は思っ
てないんだもん」

「十分悪いの！ アンタのやってることは、犯罪なのよ！」
今年に入って5回目だ。

亮平が万引きをするのは。

初めてそれが起こったのは新学期早々の4月。学校区外のコンビニエンスストアでなぜか亮平は人参を万引きした。初回ということもあり、更生可能と見なしていただけ。しかし、5月のゴールデーンウィークには学区内の駅前にあるレンタルCDを無断で持ち出した。最近、警報装置がこの手の店に完備されているのをどうやら亮平は知らなかったようだ。このとき持ち出したCDは「胎教に良い音楽」。思わずその名前を聞いたときには笑ってしまいそうになり、

こらえるのが大変だった。

3回目は間もなかった。1週間しか経っていなかった。今度は「子どもモリーズパンツ」。オムツだ。ここまで来ると訳がわからない。それ以前に、そろそろ罪を免じてもらうわけにも行かず、家庭訪問という形を取った。

ちえは今年から教師として教壇に立った。それがまさかこんな子がいるクラスの担任になるとは夢にも思わなかった。

亮平の家は見るからに古そうな平屋建ての家。インターフォンを鳴らすの中から「どうぞ」と声がするだけで母親らしき人物は出てくる気もないらしい。

(どんな躰をなさってるのかしら)

失礼します、といつて中に入つてちえは愕然とした。

山積みになつた食器。もちろん、油污れたつぶり。いつからしていないのかわからないような洗濯物の山。1997年5月10日の新聞(ちなみに、家庭訪問をした日は2008年5月28日)が見える。それ以外にも雑誌、紙くず、空き缶など部屋中が散らかり放題。そしておぞましい部屋の一角にキレイな白い布団が敷かれており、その上に　まだ生後4ヶ月程度の赤ん坊がスヤスヤと眠っていた。

亮平の母親　木戸ひな 明子あきこはなんと中学3年生、つまり亮平と同

じ15歳のときに亮平を生んでいたのだった。しかし、別に先走つてそのようなことをしたわけではなかった。本当に好きな人と付き合い、その果てにできたのが亮平だったというわけだ。付き合っている相手も真剣になつてくれた。高校に行かず、働く。そう誓った。一所懸命子育てする。明子もそうだった。けれども両親が許してくれるはずもなく、二人の仲は引き裂かれた。

いろいろあつた末、亮平を産み育てることだけは認めてもらえたそうだ。その後の話し合いで相手方から毎月仕送りも来るようにはなつた。

しかし、その仕送りを明子は毎月無駄遣いしているのだと亮平は

ボヤいた。拳句の果てに亮平の知らない所で男を作り、このザマだと嘲笑気味に亮平は言った。

「でもまあ、母親だし。できることはしてやんねえと」

そういいながら、亮平は作ったミルクを哺乳瓶に入れて妹の梨末ちゃんに「梨末、ミルクでちゅよ」と言っただけであやしなうがらミルクを妹に飲ませていた。

明子は 産後うつになつていてという診断が下されていたらしい。

明子が産後うつになつたのは4ヶ月前。つまり、今年の1月だ。それ以前に亮平がどんなことをしていたのかは知らない。

話を聞けば、春休み中にも亮平の素行はあまり良くなかつたという。それが顕著になり始めたのは4月に入った頃。同じ頃、明子のうつの症状が悪化した。

その事情を知っている近所の人は亮平が罪を犯しても情状酌量のような扱いをしてきているらしい。しかし、そろそろ限界だ。

「もう5回目！ いい加減にしてもらわないと本当にアンタ、少年院に連れて行かれ……」

ちえが真剣な顔つきで怒鳴るより前に、亮平が唇を噛み締めながら涙で目をうるませていた。

「だって……もう俺も限界だもん……」

「……。」

「毎日汚い部屋で、自分の飯もロクに食べないのに梨末のミルク作つて、梨末の寝るところだけキレイにして、梨末のオムツ替えて、お風呂ともいえないようなバケツの風呂で梨末の体洗つてあげて……。でも、俺には何にもない。おいしいお菓子もないし、おもしろいマンガも買えないし、ほしい服も何にも買ってもらえないし、梨末の世話してやつても母さんがアレだからほめてもらえない……」

そのうち、ヒックヒックと泣いてしまつてすっかり声も出せない

ような状態になってしまった。

「これ以上、あの部屋で過ごすの、ヤダっていうのね？」

コクン、と小さく亮平はうなずいた。

不意に、ちえはいろんなことが頭をめぐった。

新学期。

身体測定するとき、やけに亮平が小柄だなと感じた。実際、身長は158センチしかなかった。体重は49キロ。視力も極端に悪かった。ずっと暖かくなるまでゴホゴホ咳をしていた。

どうしてもっと早くこの子の異変に気づいてやれなかったのだろう。でも、今からでも遅くない。

「行くわよ、木戸くん」

ちえは出席簿を抱え、教室を出ようとした。

「行くつで、どこに？」

鼻声で亮平が聞いた。

「決まってるでしょ。君の家に行くのよ」

「本当にいいわけ？ 教師がこんなことして」

亮平がキョロキョロと周りを見回しながら聞いた。

「別にやましいことをしているわけじゃないんだから、いいでしょうに」

「じゃあ、どうぞ」

亮平がドアを開けると、家庭訪問のときよりも強烈な臭いがちえの鼻を突いた。真夏なのだから、こんなにゴミを溜め込んでいたら異臭も発生するようになってしまう。

「やっぱ臭いよね……」

亮平が苦笑いでかつ鼻をつまみながら言う。

「でも、そうも言ってられないわ！」

ちえはグツと腕まくりをすると、部屋の片づけから始めた。少し明子もそれに反応したが、特に声もかけずにジツとその様子を見つめているばかりだった。

5分で大まかなゴミを袋に詰め終わった。次第に汚れた床が見えてくる。ゴキブリやなんだかわからない虫が出てくるたびに「ギャーッ！」と悲鳴を上げつつも掃除を続けるちえを呆然と亮平は見つめていた。

「ちよつと！ 木戸くん」

ちえに呼ばれてハツと気づいた様子で何とか部屋らしい様子を戻してきた亮平が恐る恐る部屋に入ってきた。

「梨未ちゃん、抱っこしてあげて」

「え？」

「こーんなホコリっぽい部屋に寝かせてあげちゃダメでしょ？ ほら、抱っこして表であやしてあげて」

グイッと押し付けるようにしてちえは彼女を亮平に抱っこさせた。

「ほらほら、外であやしてあげる！」

「あ、うん……」

亮平はそつと外へ出てスヤスヤと眠る梨未の顔を見つめた。

30分もすると、掃除機の音が聞こえてきた。コツソリ覗くと、部屋は見違えるようにきれいになっていた。

「梨未、お部屋とーってもキレイでちゅね」

それを聞いた梨未は「キャッ！ キャッ！」と笑い声を上げた。

20分もすると今度はお味噌汁のいい匂い。

「木戸くん、ご飯できたわよ」

「え！？ ご飯！？」

「そうよ。最近、マトモにご飯食べてないんじゃないでしょうか？ お母様の分も用意できたから、一緒にみんなでいただきますよ」

「……うん！」

亮平は嬉しそうに部屋に梨未と一緒に戻っていった。

30分ほどたった時だろうか。インターフォンが鳴った。

「あ、俺が出るよ」

亮平が箸を啜えたままドアを開けると 教頭の近藤こんどう 那美子なみこが
すごい形相をして立っていた。

「的場先生？」

部屋の空気が、一瞬にして凍りついた。

05・いいだろ、別に。(前)(後書き)

亮平のために尽くしたちえ。しかし、行き過ぎたところがあったのか？ どこからとなく現れた教頭に見つかってしまい。

05・いいだろ、別に。(後)

「どういうつもりだったんですか？」

翌日、ちえは校長室に呼び出されて教頭の尋問を受けていた。

昨日、教頭の訪問を受けてすぐにちえは帰宅させられた。亮平が何度もやましいことはない、ただ先生はウチのために尽くしてくれただけだと必死に弁解してくれた。しかし、那美子は聞く耳を持たず、ちえに「明日、朝一で校長室に来てください」とだけ言っただけで帰ってしまった。

そして、今に至る。

「どういうつもりで、木戸くんの家なんかに入り込んだんですか？」

那美子が繰り返す。ちえはおそろおそろ続けた。

「木戸くんの家を、掃除してあげるつもりで行きました」

「こうしか言いようがない。本当のことでもある。

「人様の家上がりこんで、一教師がなぜそんなことを？」

「話を聞くうちに、木戸くんの最近の粗相は家庭環境にあるのだと私は感じたため、彼のためにもまずは家の環境から整えてあげようと思っ……」

「そんなことは」

ちえが言い終わる前に那美子が遮る。校長は黙って聞いているだけ。

「そんなことは、保護者に任せるものです」

「しかし、木戸くんのお母様は現在、病気を抱えておられてまして……」

「なんですか？ そんなに我が子に目が行き届かないほどの大病ですか？」

「……。」

「ここで病名を漏らしてしまえば、それこそプライバシーも何もあつたものではない。ちえは口をつぐんだ。

「どうせ育児放棄と似たようなものでしょう。近頃の親には多いと聞きますからね。まったく、私たちの頃にはありえないことが次々と起こるものですよ」

「……。」

ちえはあまりの那美子の発言に愕然とした。こんな人が教育に携わっているのか。現実を知ってしまい、一気に空しさが胸にこみ上げてきた。

しかし、次の一言がちえの決意を決定付けてしまう。

「あなたもですよ、的場先生」

那美子が呆れた様子でソファに座っているちえを睨みつけた。

「だいたいですね、あなたにはプライバシーの保護というものが頭の中にないんですか？ 生徒の家に入り込んで……。木戸くんでしたっけ？ 彼が本当に家に入っていいとでも言ったのですか？」

「もちろん、了解を得た上で……」

「しかし、保護者の方の了解は得ていないわけでしょう？」

「それは……申し訳ありませんでした」

「本当のことをそろそろ言ったらどう？」

「は？」

ちえは一瞬、那美子が何を言っているのかわからなかった。

「何かやましいことが本当はあるんじゃないの？」

「なっ……」

何を言ってるの？ この人……。

ちえの思考回路が鈍っていく。

「本当は木戸くんに何かやましいことを言われて貴女がホイホイ誘われて、あの家に……」

(よくもそんなことが……)

バン!

ちえは机を叩くようにして立ち上がり、乱暴に校長の座る机の上にあつたペン立てから油性マジックを強引に引つ張つて取つた。その拍子にペン立てが音を立てて机から落ち、中身が床にぶちまけられた。

「的場先生!」

那美子が止めるのも聞かず、そのままさらに机の上にあつた資料を強引に取つた。校長は驚いてオドオドするばかり。

「的場先生! 立場をわきまえない!」

しかし、ちえの耳にその声は入らない。

『辞表!』と太字でデカデカと書いて、ちえはそれを乱暴に机の上に乗せた。

「は……?」

さすがの那美子も啞然としている。

「本日付けで、辞めさせていただきます」

「何を言ってるんですか!? そんなこと……!」

「手続きは大変でしょうけど、後はよろしくお願いします」

校長は呆然とするばかり。校長室を去ろうとするちえの手を、那美子が引きとめた。

「待ちなさい! いったいどういふ……!」

「こんな!」

ちえが大声で叫んだので那美子も思わず動きを止めた。

「こんな私を信頼できないんでしょう? 大人が信頼できないんじゃない、子どもたちが私を信頼してくれるはずありません。教える資格もないでしょう? 大人にすら『やましいことをしている』と感じさせるような人は。教師としての資格なんて全然ありません。そ

うじゃないですか？」

「それは……さっきの話は言葉のアヤで……」

那美子がしどろもどろになる。校長は相変わらず何も言わない。

ちえはフウツとため息をついた。

「とにかく、今日付けで失礼します。引継ぎは副担任の塩見先生にしておきますので。お世話になりました」

「ちよっ、的場せ……」

バシン！と音を立てて校長室を出た。もちろん、さっきのように突然明日から来ないなんてことはできないだろう。けれども、今日のような出来事があった以上、よくて転勤、悪ければ教師生命すら危うくなる。

それでも後悔はしていなかった。

心残りといえば。

「先生……」

声が出たほうを向くと、今にも泣きそうな顔で亮平が立っている。

「木戸くん……」

「先生、辞めるの？」

辞める、とは決まったわけではない。けれども、さっきの流れから辞職は避けられない。

「残念だけど……十中八九そうなると思うわ」

「俺のせい？」

「……そんなこと」

言い終わる前に、亮平が泣き出した。

「ゴメンなさい……。俺のせいで、俺のせいで……」

亮平はガクガクと震えて、しゃがみこんで泣き出してしまった。

「木戸くん。木戸くんのせいではないわよ？」

「でも、でも……俺が昨日、先生を家に呼んだから……」

「思い出して。先生が自分で行ったのよ。あなたのせいじゃないの。」

先生が全部悪いの」

「でも……べも……」

そこから先、亮平の言葉は言葉にならなかった。

「先生、じきに辞めなきゃならないと思うけど……木戸くんは頑張れる？」

フルフルと首を横に振った。

「頑張らないと。木戸くん、昨日はとてもいい顔してたじゃない。

お母さんも元気になってもらわないといけないし、梨未ちゃんだっているじゃない？ お兄ちゃんがしっかりしないと」

「……。」

「頑張つて」

ちえはそういって、すぐに亮平の前から離れようとした。

「先生」

その声に振り向くと、その瞬間には亮平の唇がちえのそれに重なっていた。

「え……」

「俺、先生のことずっと好きだった」

さっきの亮平とは違った、凜々しい澄んだ目でまっすぐとちえを見つめていた。

「先生が俺の家に片付けに来てくれたとき、嬉しかった。お味噌汁を作ってくれたとき、感激した。一緒にご飯を食べれたとき、夢じゃないかと思った」

「……。」

「もう一度、言います」

一呼吸置いて、亮平は言った。

「先生、好きです。付き合って、ください」

突然、蝉の鳴き声があった。夕方に鳴く、静かな鳴き方をする蝉が駐車場あたりで鳴いている。

ちえはクスツと笑い、亮平の頭を撫でた。

「ダメよ、ダメ……」

「なんで？」

「だってさ……」

ちえの本音が出た。

「君が結婚できるのは、18歳でしょ？」

「うん……」

「そしたら、3年後でしょ？」

「うん……」

「あたし、もう26歳よ？」

「で？」

「オバサンじゃん」

プツ、と亮平が笑った。

「それでも、好き」

「……」

参ったな。

この子、本気だ。

「ダメよ、ダメ」

「またかよ」

亮平が苦笑いする。

「君みたいなの若い子は、もっといい恋しなきゃ」

「俺としては、先生への恋がいい恋だけど？」
なるほどね。

この子、純粹だ。

なおさら、傷ついたりするわけにはいかない。

「それなら、もっといい恋、見つけなさい」

「……どうしても、ダメ？」

「当たり前、でしょ」

「そっか……」

諦めたような目をした。申し訳ないが、今後の自分が保障されていない今の状況で、これ以上この子を困らせるようなことをやってはいけない。

「それじゃ、今日はもう帰りなさい」

そういつて、ちえは踵を返した。

「先生」

つい忘れて、またやってしまった。

ちえの唇に、亮平のそれが重なる。

「……アンタって子は」

ちえが苦笑いする。

「いいだろ、別に」

亮平が人懐っこく笑う。

「俺、やっぱり先生が好きだもん」

負けた。

この子、本気すぎる。

「……それじゃあ、あたしを振り向かせられるような男になりなさい」

「……約束するよ」

「じゃあ、ね」

ちえが小さく手を振った。

「また、な」

亮平が振り返す。

それつきり、二人は振り返ることなく、それぞれの家路へと向かった。

1週間後。

ちえは予想どおり、瀬戸南中学校を退くことになった。朝礼の日、挨拶をするために体育館の舞台に立ったが、そこに亮平の姿はなかった。

教室で、亮平は手紙を書いていた。

「俺、絶対先生の旦那になる！ 目標20歳！」

それを、ちえのカバンに忍ばせるために亮平は職員室へと向かった。

05・いいだろ、別に。(後)(後書き)

5人の男女が経験した、かけがえのない恋。お互いに惑わし合い、誘い合い。様々な形となった彼らの恋、そして愛の終局は……？
次話、終結します。

06・1年後

「それじゃあお母さん、行ってきます」

的場 ちえ（24）はそういつて自宅を出た。

瀬戸南中学校を退職してから1年。ちえは現在、市内の大手進学塾に採用されていた。あの日以来、瀬戸南中学校の生徒たちに顔を合わせたことはない。進学塾の方向が学校とは違うということもあるのだが、それ以上に合わせづらいということもあった。

けれども、ちえの財布には常に一枚の紙が忍ばせてあった。

『俺、絶対先生の旦那になる！ 目標20歳！』

それを思い出すとずいぶん前のようなことに感じるが、まだ1年しか経っていないのである。あの日も、夕方頃になると静かな声で鳴く蝉がいた。

「あの子……結局どうしたのかなあ」

不意に、亮平のことが蘇ってきた。あの人懐っこい顔。それを見せる前、何度も万引きを繰り返していた頃に見せていたふてぶてしい顔。「いいだろ、別に」と言ったときの、少しはにかむような顔。

すべてが懐かしい。

そう思いながら信号待ちをしていると、急に大粒の雨が降ってきた。そういえば、今日は夕立の可能性があると聞いていた。大丈夫、カバンに傘は入れている。

ちえは傘を差して雨をしのいだ。しばらくすると雨脚が強くなってきた。

「待ってよ、亮平！」

その声に思わずちえが振り向くと、後ろから傘を持った女性が男性を追いかけている。

「雨降ってるのに傘忘れるなんて、相変わらずそそっかしいね」

女性がクスクスと笑う。亮平という男性は恥ずかしそうに笑いながら傘を受け取った。歩調がちえと重なり、3人が並んだ。

「そついえば、千尋と会った日もこんな雨が降ってたよな」

亮平が懐かしそうに言った。千尋も小さくうなずく。

「もう1年も経つんだね。スゴく早かった」

「うん……」

それつきり、雨の音と3人の足音しか聞こえなくなった。

「千尋」

急に亮平が名前を呼んだ。千尋も、ちえもなぜかドキツとする。

「なに？」

「夕ご飯、どつかで食べて帰る」

「うん！」

やがて、亮平と千尋はちえとは反対側の道を曲がって、駅前のほうへと歩いて行った。ちえの心がなぜかキュンと締まるような感じになった。

「こんばんは」

ちえは挨拶をして塾の教員室に入った。塾長さんとちえと同一年の先生が「こんばんは」とにこやかに挨拶を返した。

ちえはこの職場が気に入っている。前までの学校と違い、先生も生徒もお互いに思いやり、温かみがある。こういう職場が理想だった。

今日の担当は中学3年生の公立高校受験クラスだった。

出席を取る時間になったので、ちえは出席簿を開きペンを手に取った。

「安藤くん」

「ハイ！」

「飯田さん」

「はあ〜い」

生徒は15人。けっこう多いと思っていたが、この塾ではまだ少ないほうだという。

「和泉さん」

返事がない。ちえはもう一度名前を呼んでみた。

「和泉 智里さん」

やっぱり返事がない。ということは、もう一人も遅刻か。

「つてことは、いちおう確認だけど……」

ちえは苦笑いしながら出席簿の後ろのほうに目をやり、その名前を呼んだ。

「三嶋くん」

返事がない。もう一度。

「三嶋 巧くん」

「先生〜！」

急に飯田 里香いいたが手を上げて言った。

「あの二人、今日はデートって言ってたんで多分遅刻です！」

その瞬間、笑い声が教室中に沸きあがった。同時にバタバタと複数の足音が聞こえた。

「待てよ、チィ！」

男の子の声。それに続いて女の子の声。

「早くしてよ、たつくん！ 出席取ってるつてば！」

息を切らせて教室に二人が入ってきた。息も絶え絶えだ。

「ち、遅刻してすみません！」

二人が同じことを言うので、また笑いが起きる。

「いいから早く座りなさい、二人とも」

ちえはフウツとため息をつきながら二人が座るのを見守っていた。

授業が終わったのは午後9時半。

「明日からは遅刻しないようにね」

ちえにそう言われて巧と智里はペコペコお辞儀をしながら塾を出た。

「まったく、たつくんのせいでここんとこ毎日遅刻だよ」

智里がプツと頬を膨らませながら呟く。巧が慌てて手を合わせ
て「ホントごめん！ これからちゃんと自転車の鍵、しまう場所決
めとくから！」と謝った。

「約束だよ？」

「絶対！」

「それじゃあ、今日の遅刻のお詫びになんかおごってよ」

「しょーがないなあ」

そういつて二人は帰り道にあるスーパー「アキオ」に入っ
ていっ

「いらつしゃいませ！」

チョコレートアイスを2本持って二人がレジへ行くと、おばさん
とお兄さんの店員さんが二人でレジを担当していた。

『横田まみ子』

『横田 莊平』

親子だろうか。そういえば目元なんかそっくり。

「以上2点で210円のお買い上げになります」

男性のほうぐにこやかな笑顔で言い、おばさんのほうぐ素早くレ
ジを打つ。

210円を手渡し、アイスとレシートを受け取って二人は店を出
た。

「今の人たち、絶対親子だよね」

智里がもう一度レジのほうぐを振り返って言った。

「絶対そうだよ。目元も雰囲気もソックリ」

「一緒にいると似てくるんだらうね」

智里が嬉しそうに言った。

「俺たちも」

「え？」

「俺たちも似てくるといいな」

顔を赤くして巧が言ったことは、初めて聞く言葉だった。

「わっ！」

智里が急に腕を組んできたので巧はアイスを落としそうになった。

「アリガト、たっくん」

智里は涙を見せないよう、顔を伏せながらそう呟いた。

「さっきの子たち、絶対付き合ってるよね母さん」

仕事の時間を終えたまみ子と莊平は社員休憩室で着替えながらそんな会話をしていた。二人は現在、同居している。

「いいじゃないの。青春真っ只中なんだから。それより莊平。アンタには好きな子の一人くらいいいないの？」

まみ子が心配そうに言う。

「大丈夫だつて。俺、まだ21だぜ？ まだまだこれからだよ」

「どうだかねえ。アンタはあたしと似て奥手なところがあるからね」

「余計なお世話。それにいま、好きな人いるし」

「へえ？ 誰なのよ」

クルツと莊平はまみ子のほうを向いた。

「母さん」

シレッと言われたが、やっぱり恥ずかしい。

「バカ言ってるんじゃないの」

まみ子は恥ずかしそうに莊平のほうを見ずにいた。

店を出ると、入れ違いに有働智恵子と由貴親子が、そして由貴の隣にいる大柄な男の子とすれ違った。

「あらあ！ 有働さん」

まみ子の声にすぐ智恵子も「あらー！ 今までお仕事？ 」「ご苦労

様ねえ」と声をかけてきた。由貴と荘平も最近、よく挨拶をする仲になっている。

「こんばんは、荘平さん」

「こんばんは。元気そうだね」

ニコツと笑い、由貴は「相変わらずですけどね」と言う。その横で、男の子が怪訝そうにしている。

「あ、一樹。こちら、いつも私がバイトでお世話になってる横田荘平さんとお母さんのまみ子さん」

それを聞いて一樹という少年はホツとした様子を見せた。

「あらあ！ アンタが由貴ちゃんのボーイフレンド！？ まあ、男前ねえ」

まみ子がズイズイと駆け寄って一樹を品定めするように眺める。

「母さん、恥ずかしいから……」

荘平が俯きながらまみ子の服を引っ張った。

「ああ、あたしとしたことが。ゴメンなさい」

まみ子はお上品ぶってホホホと笑った。

「これからどちらへ？」

荘平が聞くと「今日、一樹と一緒にご飯食べてその帰り。見送ってあげるの！」と嬉しそうに返してくれた。

「なるほどね。優しいね、由貴ちゃんはやっぱり」

「えへへ……」

1年前の由貴ちゃんはもうちょっと暗い印象があったけど、今はそんなものは微塵も感じられない。ボーイフレンドのおかげで変わったのだろうか。

「それじゃ、時間も遅いから早く行ったほうがいいわね」

まみ子が腕時計を見ると、すでに10時15分になっていた。

「あら！ ホント。じゃあ横田さん、また今度お茶でも飲みながらゆっくり話しましょう」

「そうね！ それじゃあまたね！」

智恵子とまみ子の挨拶を聞いてから、3人はまた歩き始めた。

一樹の家に着くと同時に、ケータイの着メロが鳴った。

「誰？」

「ああ、後輩だよ。もしもし？」

そうは言ってもやっぱり心配。女の子だったりしないだろうか。

「明日から？ OK、OK。じゃあめ場先生に今から連絡しとくよ」
ピツ、とすぐにケータイを切って心配そうにしている由貴に説明をしておいた。

「今のな、レスリング部の後輩。明日から俺たちの通ってる塾に入りたいたって」

「なあんだ。安心した」

由貴はホッと胸をなでおろした。

「今から先生に電話するからもうちょっと待ってくれる？」

「うん！」

一樹は由貴の嬉しそうに笑う声を聞いてから、塾に声をかけた。

ちえが帰ろうとしているところに、電話がかかってきた。

「もしもし？」

「あ、先生？ 夜遅くにすいません。蓮沼です」

「ああ、蓮沼くん。どうしたの？」

「以前言ったと思うんですけど、俺の後輩が入塾したいって言うんでお伝えしとこうと思って」

「ああ、そうなの！ それじゃ、いつ来るのかと、名前を教えてください？」

「はい！ えっと、明日さっそく来るそうです。夕方6時くらいに」

ちえはメモを取りながら話を進めた。どうやら部活に入って中学時代より勉強時間が減ったらしく、塾でだけでも勉強したいという本人の意向があつてのことだった。

「それじゃ、名前を教えてください？」

「はい」

ちえは冷静に彼の名前をメモした。

「それじゃ、彼の担当もよろしくね」
塾長さんが優しくちえに言う。ちえは、明日は高校1年生を担当する。

「はい。出席簿にも書き足しておきます」
ちえは高校1年生個別クラスの出席簿に、彼の名前を書き足した。

『木戸 亮平』

「また会えるね……」
ちえはそう言って微笑み、出席簿を閉じた。

完

06・1年後（後書き）

『Invitation』を最後までお読みいただき、ありがとうございます。恋愛物には書きなれていないがために、初めの趣旨とズレてしまったお話もありました（>|<;）皆様にもっと評価していただいて、改善するべきところを指摘していただけましたと思います。

『奏（Kanade）』のほうはまだ続きますので、そちらもよろしくお願ひします。本当にありがとうございました（*^O^*）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5520c/>

Invitation

2010年10月8日14時55分発行